



寄せられた声を力に

100万人署名に挑戦

「STOPインボイス」小泉なつみさんに聞く

「インボイスの実施を本気で止めようと思ったし、止められると思った。でも、できなかった。これからどうしていくのか」。制度施された10月1日、「インボイスの問題を考えるフリーランスの会」発起人の小泉なつみさんは、心の中にぽっかりと穴が空いたような気持ちになりました。インボイス制度の問題を知ってからこの2年間、仕事を投げ打ってたたかってきました。実施中止・延

期を求める署名は56万人を超え、オンライン署名では最高数を集め、署名の受け取りを拒否していた岸田首相にもねばり強く働き掛け、秘書を通して署名を手渡しました。

アンケートに3千人回答

「手ごたえはあった。だから悔しい。活動はいつまで続くのか。もうやめたい。でも、ここで引き下げれば、希望を失う人もいるかもしれない」。小泉さんは自問

自答しながら「STOPインボイス」の活動が続けました。

気持ちを切り替えたのは、インボイス実施から1カ月を機に取り組んだ「緊急アンケート調査」

わずか11日間（10月20～31日）で3千人の回答が

寄せられ、そのうち2千人が「自由記入」欄に声を寄せました。

一方的な取引停止や値引きに苦しむ声、免税事業者が心ない誹謗中傷、差別を受けている実態、税負担をめぐっての板挟み、不和、共倒れも。業務が増え、疲弊している会社員の姿、「子どもが産めない」「子育てができない」という悲痛な声もありました。「この人たちの声を届けなきゃ」。小泉さんは前を向きました。

アンケートでは、先の見通しが悪い、廃業や退職、移動を検討などマインナスの影響を受けた人が7割を占め、相談先のない人の7割が年商1千万円以下の小規模事業者も「登録済み・登録検討中」が5割占めるも、そのうち4割が「登録しなければ仕事の継続が困難」など消極的な理由ということも浮き彫りになりました。

胸を痛めたのは「自死」に関する記述が10件ほどあったこと。「何故、命を落とすことを考えなければならぬのか」。憤りを覚えました。

小泉さん自身も5年間、レギュラーでライターの仕事をしている取引先から番号を取らなければ2%の

値引きを了承することを迫られました。「原稿のボリュームもクオリティも納期も同じなのに、2%を値引きするとはどういうこと？ クオリティを2%分引き下げるのか」。相手先には「承知できない」とはつきり伝えました。

税のために何故苦しむのか

一緒に活動する仲間も苦悩しています。漫画家の田辺崇さんは老舗の出版社から仕事を請けていますが、2%分の消費税を出版社が負担しています。「大きな出版社ではないので、負担に耐えられるか」と心配しています。声優の甲斐田裕子さんは、先輩から「マネージメント2%分の引き上げを通告された」と相談されました。「税のために何故、お互い苦しまなければならないのか」と怒っています。

「STOPインボイス」の仲間はこれから100万人のオンライン署名を集め、国会議員や地方議会にも働き掛けを強めます。「インボイス制度を廃止させるまで、絶対に諦めない」。強い決意で挑んでいます。



右から田辺さん、小泉さん、甲斐田さん